# 鉄のまち 室蘭を 若いパワーが 熱くする

文・山本朋史　写真・工藤隆太郎

クラブを訪ねて

THE ROTARY CLUB OF MURORAN NORTH

室蘭北ロータリークラブ

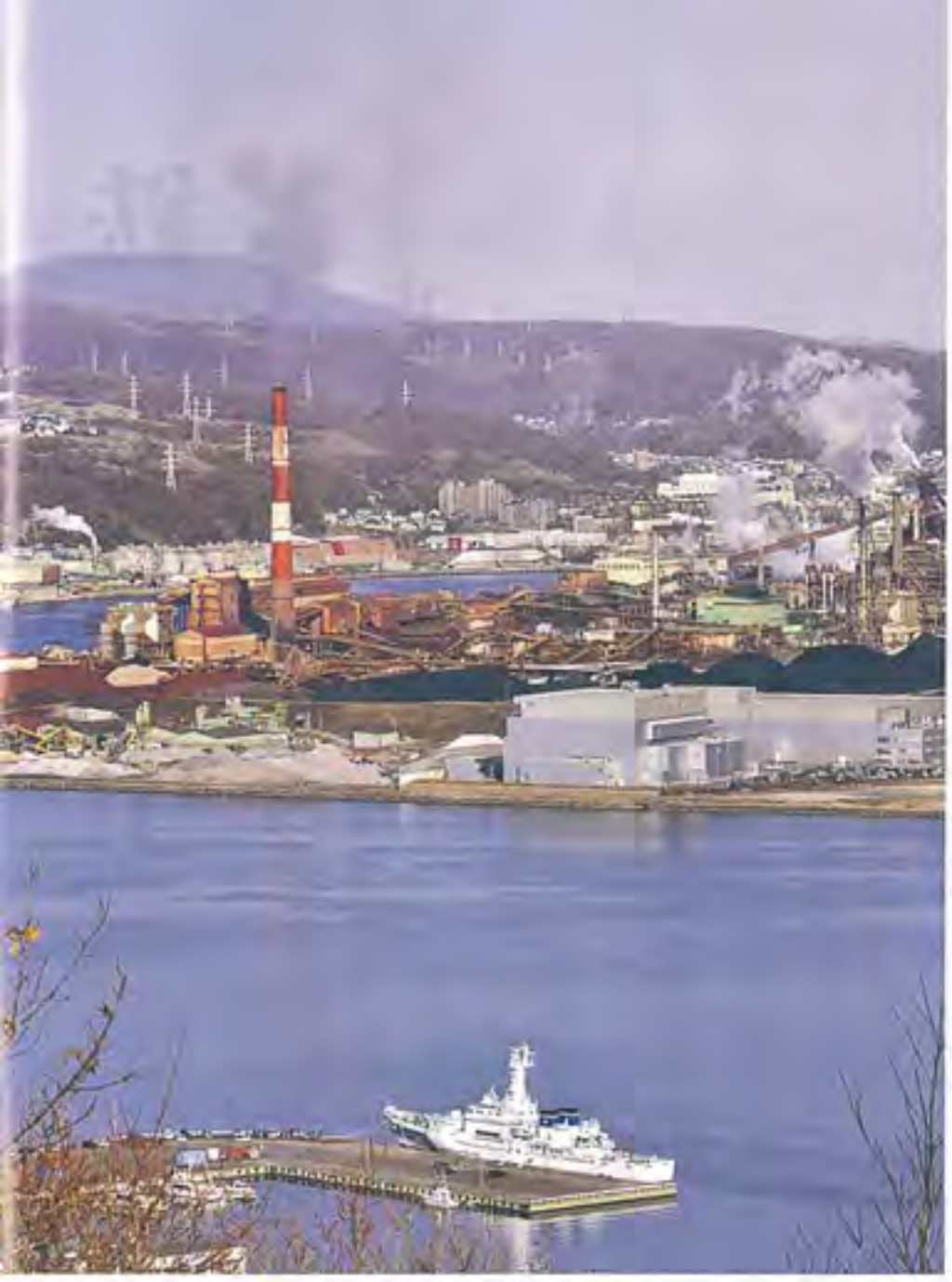
第2510地区（北海道）

**室蘭はアイヌ語で「小さなくだり坂」**

一一月初旬というのに東京者の私には、はや厳冬。北海道は大荒れだった。新千歳空港に到着すると前日に降った雪が積もっていた。高速バスで室蘭に向かうつもりだったが、今回取材の世話役をしていただいた室蘭北ロータリークラブ（RC）の加藤栄吉幹事から、「打ち合わせもあるので空港に迎えに行きます」とメールがあり、お言葉に甘えた。空港到着ゲートで加藤さんと合流。廣瀬禎ガバナー補佐の運転する車に乗り込む。

二〇一六年は北海道に冬が早くきた。でも、室蘭は太平洋に面していて道内では寒さは厳しくない方だという。廣瀬さんの言葉に人一倍寒がりの私はホッとした。空港から室蘭まで一時間少しで到着。高速道路はすいていた。気温は九度。千歳

強い雨の中、カサを閉じてもらって撮影した。熱い会員たち


室蘭市内を望む

より暖かい。快晴。しかし、天気はくだり坂で翌日の天気予報は曇りのち雨。写真を撮っておいた方が良い。ちょっと慌ただしかったが、加藤さんお薦めの室蘭の景勝地を案内してもらった。

ところで、室蘭という地名の由来はどこから来たのだろうか。廣瀬さんは自信たっぷりに言った。

廣瀬禎ガバナー補佐

「アイヌ語でなだらかな坂、という意味だそうです。この名の発祥地があります。通り道ですから行ってみましょう」

崎守町に向かった。室蘭の名付け親は明治政府の開拓判官だった松浦武四郎。地名発祥の地なる場所に行くと看板が立っていた。室蘭はもともとはアイヌ語で「モルラン」。語源は「モ・ルエラニ」で「小さなくだり坂」の意味だという。室蘭といえば製鉄所。「鉄の街」のイメージしかなかったが、地球岬をはじめ他では見られない景勝と歴史に恵まれた土地だった。室蘭港には「プロビデンス号室蘭来航200記念碑」が建てられていた。

一七九六（寛政八）年、イギリスの海洋探検家、W・R・ブロートン中佐がプロビデンス号を率いて太平洋探検航海中、室蘭港を発見。「噴火湾」と名付け、津軽海峡を横断した。記念碑は室蘭にある三つのロータリークラブと室蘭市などが資金を出してつくった。除幕式には駐日英国大使も列席したという。室蘭港の先に灯台が残る大黒島がある。この島に探検航海中に亡くなったプロビデンス号の船員が一人眠っているそうだ。

室蘭の半島部（絵鞆半島）の外海は一三キロメートルにわたる断崖絶壁。大自然の眺望に息をのむ。絵鞆からマスイチ浜へ至る白い崖は火山灰の堆積物。「銀屏風」など名所の連続だ。イタンキの浜の鳴り砂を触ってから、地球岬まで細い道を一気に登った。途中でトッカリショ浜を崖の上から望む。高所恐怖症の私は足がすくんだ。

「突端まで行くと危ないですよ。崖から落ちたら生きては戻れない」

崖には熊笹が生えているが、強い風のためだろう、ほとんど丈がのびない。以前、安野光雅さんとスケッチ旅行に行ったアイルランドの海岸風景を思い起こした。

地球岬から見た太平洋は広大だった。地球岬は野生の鳥たちのサンクチュアリのようだった。多種生息する鳥類やヒナを狙ってハヤブサが空を飛び交う。沖にはイルカや鯨も多く出没するそうだ。

トッカリショ

室蘭地名発祥の地にある碑

プロビデンス号石碑

地球岬

新日鐵の製鉄部門を分離して設立された北海製鉄の高炉（新日鐵住金提供）

室蘭港近くから夕日を望む

ホエールウオッチングもできるという。

夕方、四時三〇分過ぎ。太陽が海岸線に沈むのを室蘭港の近くの喫茶店でみた。まばゆい。神々しいばかりだ。室蘭の自然がこんなに素晴らしいとは。

「こんな絶景の宝庫なのに観光客はほとんどいませんね。もっとPRすればいいのに」

私の無知な言葉に、加藤さんがそっと返した。

「室蘭は古くからの企業城下町。鉄冷え以降やっと観光に力を入れてきた。まだ発展途上ですよ」

歴史ある瑞泉閣の建物

その企業、日本製鋼所室蘭製作所を訪ねたのは翌日。クラブ例会の前だった。世界最大級の大型プレスで六〇〇トンの鋼塊を鍛錬する工程を見た。この迫力とは別に印象に残ったのは皇太子時代に大正天皇が泊まるために、と一九一一（明治四四）年に新築された瑞泉閣。伊藤博文元首相や子爵・杉孫七郎の書も見事だったが、とりわけ庭園がきれいだった。紅葉に目を奪われた。

## 若い会員に責任ある仕事を任せる

徳永賢二会長

例会の直前に徳永賢二会長に聞いた。

「室蘭北RCが最もアピールしたい点は何ですか」

徳永会長は奉仕活動などをあげたうえで、

「全国的に見てもロータリークラブの会員は年齢層が高くなっていますが、うちは若い人が多いのが特徴です。会員数も一時は三二人まで減少しましたが、いまは四三人と増えました」

出席率も高い。笹谷豊明・青少年奉仕委員長は、

「入会以来二六年間、無休です」

最高齢の村井幺乙医師は八九歳。前年度は皆勤だった。「この歳になっても、仲間と話すことができるのは幸せ」。かくしゃくたるものだ。

登別RCの
遠藤秀雄パストガバナー

例会で卓話をした登別RCの遠藤秀雄パストガバナーは、

「室蘭北RCは五〇歳以下の会員が一六人もいて活気がある。全国的に会員が減っているのにこは増えている珍しいクラブ」

とたたえる。一時は一八万人あった室蘭市の人口はいまは半分の九万人。街にはシャッターを下ろしたままの店が目立つ。クラブのこの生命力を感じさせるエネルギー源は何か。

仲間うちでシンデレラボーイと呼ばれる藤井徹也さんは昨年入会した「新人」。

先端企業誘致で室蘭にきた精密加工会社に三五歳でアルバイトで入社。先代の創業社長には息子もいたが、藤井さんは信頼され白羽の矢で社長に抜擢（ばってき）された。最初は従業員五人ではじめた会社は大きくなって、今やマレーシアに工場をつくるまでに。従業員は一二〇人という企業に成長した。藤井さんは言う。

「なんといってもこのクラブは居心地がいい。五三歳の若輩ですが、若手にも責任ある仕事を任

加藤栄吉幹事

藤井哲也会員

笹谷豊明会員

西野義人会員

懇親会（上）、若手集合

せてくれる」という。

年少会員の中心になっているのが椛澤哲也さん。居酒屋グループの若手社長だ。「ロータリークラブに入るならガバナーになりたい」と豪語し驚かせた。椛澤さんは言う。

「ぼくは青年会議所にもいましたが、ここのクラブは古めかしい、かしこまったところがなくていい。仲間の若い経営者の中にも入りたがっている人がいる。一〇人は増やしてみせますよ」

西野義人さんは、室蘭工業大学と産学協同事業を進めている若年経営者である。

「室蘭はこれまで日本製鋼所と新日鐵住金という二大企業に頼ってきた。でも、これからはこうした大樹に頼るのではなく自分たちで生き残りの道を探らなければならない」

例会のあと、全員写真を撮るときになって雨が強く降ってきた。くだり坂の天気が最悪の状況でやってきたのだ。白鳥大橋をバックに展望台で写真を撮る予定だったが、例会場で押さえの写真を撮影した。内池貞人広報委員長からは、

「雨がやむかもしれない。室蘭らしい場所の方が見ばえがいい。とにかく行ってみよう」

威勢のいい声に押されて車十数台に分乗して展望台に向かった。

決行した結果が冒頭の写真である。大雨と強風の中で私はブルブルと震えていたが、会員はみな傘を閉じて頑張った。これだけ見ても、このクラブの元気が伝わってくるではないか。

荒天は続き、深夜からは雪になったようだ。朝、カーテンを開けると真っ白な冬景色。気温は氷点下一度。室蘭には珍しい吹雪。

「鉄の街」室蘭を活性化する活動も進んでいる。「アイアンフェスタ」もその一つ。さまざまな企画の中でブランド商品も生まれた。室蘭工業大学の学生が二〇〇四年に始めたボルトやナットを使った人形づくりが人気を博した。「ボルタ工房」をつくり二〇〇六年に商品化。現在では一〇〇種類以上のボルタを製作、男の子の「ボルタ」と女の子の「ナッティ」との愛らしいシリーズも好評だ。

ホテルで毎週火曜日に行われる例会風景

輪西の新日鐵住金室蘭製鐵所にも出向いた。四一八万平方メートルという広大な敷地のほとんどが埋め立て地だという。昭和四十年代には関連企業も含めて三万人を超す労働者が働いていたが、今ではおよそ四〇〇〇人。車のエンジンまわりに使われる特殊鋼棒・線材などを製造している。

「よく聞かれますが、ボルタはステンレス製で、残念ながら室蘭製鐵所のボルトではありません」

早とちりの私は間違えるところだった。危ない、アブナイ。思い込みはいけない。

野球などスポーツをするボルタ君

ボルタ君の製作風景

山本朋史（やまもと・ともふみ）
週刊朝日シニアライター
工藤隆太郎（くどう・りゅうたろう）
フリーの写真家